

ヨブの苦難をめぐって——『ヨブ記』をたどる

宮下 聡子

『ヨブ記』¹に描かれるヨブの苦難は義人の苦難と特徴づけられる²が、義人の苦難は不条理と感じられる。本稿では、この感覚に忠実に、ヨブの苦難に焦点を合わせて『ヨブ記』をたどる³。そして、ヨブの苦難とはどのようなものであったのか、ヨブはどのようにして苦難に遭ったのか、ヨブに苦難を与えた神とはどのような神なのか、ヨブの苦難からどのような教訓が得られるのか、といったヨブの苦難をめぐるといって考察する⁴。

1 プロローグをたどる

ヨブは「誠実で、まっすぐで、神を畏れ、悪から離れていた」（一1）。つまり、ヨブは神への信仰においても道徳的にも非の打ちどころのない義人であった。ヨブは七人の息子と三人の娘がいて、羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭を保有し、非常に多くの使用人がいる「東の子たちの中で最も大いなる者」であった（一2-3）。ヨブの息子たちはそれぞれ自分の家を持っていたと見られ、順番に、三人の姉妹も招いて自分の家で宴を開いていた（一4）。そして「その宴の日が一巡りすると、ヨブは彼らと呼びよせて彼らを聖別した。彼は朝早く起きて、彼らの数に応じた全焼のいけにえをささげた。ヨブは、私の息子たちはもしかしたら罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない、と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた」（一5）。ヨブは自分自身の悪だけでなく自分の息子たちの罪にも常に細心の注意を払い、警戒を怠らなかつたのである。このように、ヨブは義人にして幸福な人であった。

次に神とサタンのやりとりの場面になる。「その日になり、神の子たちが来てヤハウエの前に立った。サタンも来て彼らの中にいた」（一6）。神はサタンにこう言った。「あなたは私の僕ヨブに心をとめたか。なにしろ彼のように誠実で、まっすぐで、神を畏れ、悪から離れている者は地にいないのだ」（一8）。神がヨブを義人と認めていることがわかる。さて、神のこの言葉に対してサタンはこう答えた。「ヨブは理由なく神を畏れるでしょうか。あなたは彼と彼の家と彼のすべての持ち物の周りに垣を巡らせておられるではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されるので、彼の家畜は地にあふれています。ひとつ、あなたの手をのばして彼のすべての持ち物を打ってごらん下さい。彼は面と向かってあなたを呪うにちがひありません」（一9-11）。神はサタンに言った。「では、彼のすべての持ち物をあなたの手に委ねよう。ただし、彼に手をのばしてはならない」（一12）。サタンが神の前から出て行くと、ヨブに属する家畜や人に次々と災いが降りかかる。ヨブの長男の家で宴が開かれていた日のことである。「牛が耕し、その傍らで雌ろばが草を食べていると、シェバ人が襲ってきてこれらを奪い、若い者たちを剣で打ち殺し」（一14-15）、「神の火が天から下って、羊と若い者たちを焼き滅ぼし」（一16）、「カルデア人が三組に分かれてらくだを襲ってこれらを奪い、若い者たちを剣で打ち殺し」（一17）、ヨブの長男の家での宴の最中に「荒野の彼方から大風が来て家の四隅を打ち、家が若い者たちの上に倒れて彼らは死んだ」（一19）。それぞれの場に居合わせ、一人だけ難を逃れた計四人の使者たちが立て続けにヨブにこれらの知らせをもたらし

た。前三者の「若い者たち」は牧童たちを、四つ目の「若い者たち」はヨブの子どもたちを指すと考えられる。ヨブは、たちまちにして牛、雌ろば、羊、らくだおよび牧童たちをことごとく失い、子どもたち全員を亡くしたのである。「ヨブは立ち上がり、彼の上衣を裂き、彼の頭を剃り、地に伏し、押し、言った。「裸で私は母の胎から出た。裸で私はそこに帰ろう。ヤハウェは与え、ヤハウェは取られる。ヤハウェの名は祝福されるように」(一20-21)。ヨブは自らの持ち物の与奪の権限が全面的に神にあることを認めるのである。実に、「このすべてにおいてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚劣なことを言わなかった」(一22)とあるとおりである。サタンの勘ぐりは的外れであったことが証明されたのである。

その後また神とサタンの間でやりとりがある。「その日になり、神の子たちが来てヤハウェの前に立った。サタンも来て彼らの中にいて、ヤハウェの前に立った」(二1)。神はサタンに言った。「あなたは私の僕ヨブに心をとめたか。なにしろ彼のように誠実で、まっすぐで、神を畏れ、悪から離れている者は地にいないのだ。彼はなお彼のまことを堅く保っている。あなたは私を唆して理由なく彼を呑み込ませようとした」(二3)。ここでも神はヨブが義人であることを認め、さらにヨブが家畜や牧童たちや子どもたちをことごとく失ってもなお神への忠誠を堅く保ったことを称賛している。しかも神は、神を唆して理由なくヨブを呑み込ませようとしたとしてサタンを責めているのである。さて、神のこの言葉に対してサタンは次のように答えた。「皮のためには皮です。人は自分の命のためにはすべての持ち物を与えます。ひとつ、あなたの手をのばして彼の骨と彼の肉を打ってごらん下さい。彼は面と向かってあなたを呪うにちがいありません」(二4-5)。神はサタンに言った。「では、彼をあなたの手に乗せよう。ただし、彼の命は守りなさい」(二6)。サタンは神の前から出て行って、「ヨブを足の裏から頭のとっぺんまで悪い腫れ物で打った」(二7)。それでヨブは「陶器のかげらを取って身を掻いた。彼は灰の中に座っていた」(二8)。ヨブの妻はヨブに「あなたはなおあなたのまことを堅く保つのですか。神を呪って死になさい」(二9)と言ったが、ヨブは妻を諫めて「あなたは愚かな女の一人が言うようなことを言っている。私たちは神から良いことを受けるのだから、悪いことも受けようではないか」(二10)と言った。今度もヨブは自らの禍福を全面的に神に委ねる姿勢を崩さなかったのである。「このすべてにおいてヨブは彼の唇で罪を犯さなかった」(二10)とあるとおりである。またしてもサタンの勘ぐりは的外れであったことが証明されたのである。

その後、ヨブの三人の友人たち、エリファズ、ビルダデ、ツォファルがヨブの災難のことを聞き、申し合わせてヨブを慰問した。三人は声を上げて泣き、心からヨブに同情したが、ヨブのあまりの惨状にヨブに話しかけることもできず、七日七晩ヨブと共に地に座っていた(二11-13)。

* * *

ここでヨブの苦難の内容を確認しておくこと、神に嘉されて幸福に暮らしていた義人ヨブが突如、牛、雌ろば、羊、らくだおよび牧童たちを来襲者の略奪と襲撃あるいは天からの「神の火」でことごとく失い、子どもたち全員を荒野の彼方からの大風による家屋の倒壊によって亡くし、ヨブ自身も全身を悪性の腫れ物に侵されるというものであった。いわば義人ヨブの幸福な生活の突然の破綻である。ヨブの苦難の理由については、神へのヨブの信仰は、ヨブが義人であるとはいっても、所詮ご利益信仰であろうと勘ぐるサタンに対して、ヨブの信仰はご利益とは関わりのない神のための信仰であるということ、神が確証するためであった。そしてそれはヨブの知る由もないことであった。しかも苦難に遭っても神へのヨブの忠誠は微動だにしない。ヨブの苦難をどう考えたらよいのか。

八木誠一氏は、現形の『ヨブ記』に描かれる神を「神ご自身」と区別して「カミサマ」と呼んだ上で⁵ 次のように述べる。「そもそも「ヨブが神を敬っているのは、それが得になるからにすぎない。損だと分

かれば神を呪うに違いない」とサタンがいえば、カミサマが「そんなことはない。嘘だと思えば実験してみろ」と応じる。その結果ヨブの災難が始まるというのはひどい設定だ。カミサマはヨブに絶対の信頼を置いているからサタンに悪事を許したのだろうか。「そんなテストの必要など全くない」と、サタンの教唆をつばねるのが本当の知と信頼であろう。〔…〕そもそもサタンの鼻をあかすことに何の意味があるか。しかるに序章のカミサマはサタンの挑発にやすやすと乗ってヨブをひどい目にあわせるオッチョコチョイで傍迷惑なお方である」⁶。

C・G・ユングは、ヨブの苦難の責を神のいわば不明に帰する。「驚くほどやすやすと、また理由なくヤハウェは自らの子たちの一人である疑念に影響されて、ヨブのまことに関して不確かにさせられてしまった。感じやすさと猜疑心のために彼は疑いの単なる可能性でもういきり立ってしまった」⁷。それでヤハウェは「誠実な僕ヨブに理由も益もなく道徳的荷重試験を受けさせようとする」⁸。

パート・D・アーマンに至ってはさらに辛辣である。「神自身が、ヨブが経験した悲惨、苦痛、苦悩、喪失を引き起こしたのである。「敵対者」だけを責めることはできない。また、この喪失の中身を思い起こすことが重要である。財産の喪失だけではない。それだけでも十分ひどいが、さらに体の毀傷とヨブの十人の子どもの惨殺まで含まれているのである。しかし何のために？「理由なく」——ヨブは神を呪う十分な道理があったとしても決して神を呪わないということをサタンに証明するためという以外には、彼には神を呪う道理があったのか。彼はそのような扱いに値することは何一つしなかったということ思い起こしていただきたい。彼は現に無実であり、それは神自身が認めているとおりでである。神が彼にそのようなことをしたのはサタンとの賭けに勝つためであった」⁹。ヨブの苦難の不条理と神の理不尽へのアーマンの憤激が伝わってくる。

並木浩一氏は、ヨブの苦難の不条理は認めつつも神について別の見方を示している。「ヨブは例外的な義人であった。この例外者にはサタンが関与して、例外的な仕方でも苦難が下った。それはヨブのあずかり知らない天上での神とサタンとのやりとりの結果であり、彼にとっては不条理の極みであった。〔…〕ヨブは翻弄された。酷い仕打ちであり、今日の言葉で言えば、彼は人権をまったく無視されたと言える。しかし他方、神はヨブの出方に自己の權威の行方を預けたのであるから、神はヨブを同伴者として選び、神と同様に自由に判断し行動する者として処遇したと見なければならぬ」¹⁰。

いずれにしても、ヨブが義人であったにもかかわらず、否むしろ義人であったからこそ苦難に遭ったというのは、なんとも皮肉で不条理な話である。

2 本編をたどる

2.1 ヨブと友人たちとの対話

慰問に訪れた三人の友人たちと七日七晩沈黙のうちに過ごした末にヨブが発したのは、自らへの呪いの言葉であった。「滅びよ、私が生まれた日と男の子がはらまれたと言った夜」（三3）。「なぜ私は子宮から出て死ななかつたのか。胎から出た時息絶えなかつたのか」（三11）。「どうして膝が私を迎え、なぜ私が吸うことになる乳房があつたのか」（三12）。「あるいは〔どうして〕私は密かにおりる胎児のようではなかつたのか。光を見ない嬰兒のようではなかつたのか」（三16）。「なぜ彼は苦しむ者に光を与え、魂の辛い者を生かしておかれるのか」（三20）。このように、ヨブは自分の生まれた日、遡って受胎の夜を呪う。また、生まれた時に、乳児のうちに、あるいは遡って胎児のうちに死ななかつたことを嘆く。さらに、神に生かされていることをかこち、死を希求する。

ヨブの嘆き節を受けて最初に口を開いた友人はエリファズであった。「誰かがあなたにあえて語るならあなたは疲れ果てるだろうが、誰が言葉をとめられようか」(四2)。エリファズは語り出す。「思い出しごらん下さい。誰が無実なのに滅びたか。どこでまっすぐな者が絶たれたか。私の見てきたところでは、不義を耕し、害悪を蒔く者はそれを刈ることになる。彼らは神の息吹によって滅び、彼の怒りの息によってうせる」(四7-9)。遠回しな言い方ではあるが、ヨブが苦難に遭ったからには、ヨブが何か罪を犯し、神の怒りに触れたにちがいないというのである。またエリファズは「人は神より正しいだろうか。人間は彼の造り主より純粋だろうか」(四17)というある夜彼に臨んだ啓示の言葉をヨブに伝授する。さらにエリファズは「私なら神を求め、神に私のことを任せろ」(五8)と、自分がヨブの立場だったらどうするかをヨブに示す。しかしそもそもヨブには思い当たる罪はない。ヨブはエリファズに乞う。「私に教えてほしい。そうすれば私は黙る。私がどのような過ちを犯したのか理解させてほしい」(六24)。ヨブはまた、自分でも気づかずに罪を犯していた場合も想定し、次のように神に訴える。「私が罪を犯したといっても、人を見張るあなたに私は何ができましようか。なぜあなたは私をあなたの的に据え、そのために私は私にとつての重荷になったのですか。なぜあなたは私の罪過をゆるさず、私の咎を除いてくださらないのですか」(七20-21)。

次に口を開いたのはビルダデである。「いつまであなたはそのようなことを言っているのか。あなたの口の言葉は激しい風だ」(八2)とヨブを諷めてこう説く。「神は公義を曲げられるだろうか。全能者は正義を曲げられるだろうか。もしあなたの息子たちが彼に罪を犯し、彼が彼らを彼らの罪過の手に渡されたのなら、もしあなたが神を求め、全能者にあわれみを乞うなら、もしあなたが清くてまっすぐなら、今こそ彼はあなたのために目を覚まし、あなたの正義の住まいを回復してくださる」(八3-6)。ヨブの息子たちが死んだのは彼ら自身の罪に対する神の罰だと言わんばかりである。ヨブにしても、息子たちの罪の可能性を想定していたからこそ彼らのために神に全焼のいけにえをささげもしていた(一5)のであるが、あのような無残な死に相応するような罪を彼らが犯したとは思えなかったのであろう。ヨブは「どうして人は神に対して正しいだろうか」(九2)という弁えを示しつつも、神の方が不当なのだという思いを口にする。「彼はつむじ風で私を砕き、理由なく私の傷を増やされる」(九17)等々。神へのヨブの態度は次第に挑戦的になっていく。「私は神に申そう。「私を有罪としないでください。なぜ私と争われるのか知らせてください」(一〇2)。

次いでツォファルが「言葉数がこれだけ多くては答えないでいられようか」(一一2)と口を開く。「彼が知恵の秘密をあなたに示されるように。知性が二倍になるからだ。そして神があなたの咎の一部を忘れてくださっているということを知りなさい」(一一6)。ツォファルもヨブは罪を犯したと、それも本来ならもっとひどい苦難に値するような罪を犯したと見ているのである。そして「もしあなたがあなたの心を確立し、あなたの掌を彼に向けて広げるなら、もしあなたの手の不義を遠ざけ、あなたの天幕に不正を住まわせないなら、その時こそあなたは汚れを離れてあなたの顔を上げ、鑄直されて恐れることはない」(一一13-15)と諭す。ところがヨブは「私は全能者と話そう。私は神に申し立てたい」(一一3)と言い、友人たちを「あなたたちは皆やぶ医者だ」(一一4)と痛罵し、「どうかあなたたちは黙るように。それがあなたたちの知恵というものだ」(一一5)と彼らを制する。そしてこう述べる。「そうだ、彼は私を殺されるだろう。だが、私は待つてはいられない。私の道を彼の面前で申し立てよう」(一一15)。ヨブは自らの正しさへの確信を強めて、「見よ、私は訴訟の準備を整えた。私は知っている。私は正しいということ」(一一18)。ヨブはしかし、神にこう願い出てもいる。「咎と罪がどれほど私にあるのか、私の罪過と罪を私に知らせてください」(一一23)。ヨブはまた、「若い時の咎」(一一26)にも言及している。ヨブも自ら

がまったく罪を免れていると認識しているわけではないが、少なくとも一人前になってからは信仰上も道徳的にも正しく生きてきたという自負があり、それで自らの正しさを主張してやまないのである。

エリファズが再び語り出した。「何があなたからあなたの心を奪い、何があなたの目をぎらつかせるのか。あなたが神に憤りを向け、あなたの口からそのような言葉を発するとは」(一五12-13)とヨブを叱責した上で、「どうして人は清いだろうか。女から生まれた者は正しいだろうか」(一五14)と言い、「邪な者は一生もだえ苦しむ。残虐な者には年の数が定められている」(一五20)云々と、ヨブに当てつけるように悪人の滅びの運命について述べる(一五20-35)。ヨブは「そのようなことを私は多く聞いた。あなたたちは皆煩わしい慰め手だ」(一六2)とはねつける。そして神について次のように語る。「彼の怒りは私を掻き裂き、彼は私に敵対し、彼は私に向かって歯をかみ鳴らした。私の敵は私に向けて目を鋭くした」(一六9)、「私は平穩に暮らしていたのに、彼は私を破り、私の首を捕らえて私を打ち砕き、私を彼の標的として立てられた」(一六12)等々。ところがその直後でヨブは次のようにも言っている。「今でも、見よ、天に私の証人はおられる。私の保証人は高みにおられる」(一六19)。ヨブが正しいことを証し、保証してくれる神をヨブは高みに望むのである。

次いでビルダデが再び話し始めた。ビルダデはヨブに「自らの怒りで自身を掻き裂いている者よ」(一八4)と、ヨブが神について言った言葉(一六9)を採り入れ、批判を込めて呼びかける。そして「邪な者の光は消え、彼の火の炎は輝かない」(一八5)云々と、ヨブに当てつけるように悪人の滅びの末路について語る(一八5-21)。ヨブは「いつまであなたたちは私の魂を悩ませ、言葉で私を踏みにじるのか。これで十度もあなたたちは私を辱め、私を虐げて恥じない」(一九2-3)と応じる。そして「今や知りなさい。神が私を不当に扱い、彼の網が私を包囲していることを。私が「暴虐」と叫んでも答えてもらえず、私が助けを求めても公義はない」(一九6-7)と訴える。しかし他方ヨブは「私は知っている。私を贖う者は生きておられ、後に彼は塵の上に立たれることを」(一九25)とも言い、ヨブを贖う神を待ち望んでもいる。

ツォファルが再び口を開き、「私は私を辱める訓戒を聞くので、私の悟りの霊が私に答えさせる」(二〇3)と喧嘩腰にヨブに臨む。「あなたはこのことを知っているか。昔から、彼が人を地上に据えられてよりこのかた、邪な者の歓声は束の間で、不敬な者の喜びは一瞬であるということ」(二〇4-5)云々と、悪人が受ける神のさばきについて、ヨブが悪人に該当することを匂わせつつ切々と説く(二〇4-29)。ヨブは「どうして邪な者が生きながらえ、年をとってなお力を増すのか」(二一7)と反論し、悪人が栄えている事実を指摘する(二一7-16)。その際「邪な者のはかりごとは私には無縁だ」(二一16)と、自らの立場を示すことも忘れない。ヨブはさらに「邪な者の灯が消え、彼らの上に災いが臨み、彼が彼の怒りで彼らに滅びを割り当てられたことが何度あっただろうか」(二一17)と、神は必ずしも悪人を滅ぼしはしないと主張する。

エリファズは三たび語り出し、「あなたの悪は大きく、あなたの咎は果てしないのではないか」(二二5)と、もはや憚ることなくヨブを悪人呼ばわりする。そして「彼〔神〕の口から教えを受け、彼の言葉を心にとめなさい」(二二22)とヨブに忠告する。ヨブは「どこで彼に会えるのか私は知りたい。彼の御座まで私は行きたい」(二三3)という願いを口にしつつ、「彼は私の行く道をご存じである。彼が私を試されるなら、私は金のように現れ出る」(二三10)と、自らの正しさへの自負に基づいて神に嘉されることへの確信を述べる。

ビルダデも三たび語り出し、「どうして人は神に対して正しいだろうか。どうして女から生まれた者は清いだろうか」(二五4)と、自らの正しさに固執するヨブを間接的に批判する。それに対してヨブは「私は断じてあなたたちを正しいとはしない。私は息絶えるまで私のまことを離さない。私は私の正しさを堅

く保ち、捨てない。私の心は生涯私を責めることはない」(二七五-6)と、自らの正しさにいよいよ固執する。そして神に向かって「私があなたに向かって叫んでもあなたは答えられません。私を立ててもあなたは私を認識されません」(三〇20)と訴え、自らの正しい思いや行為の具体的な事例を並べて自らの潔白を誓い(三一1-34、38-40)、「誰か私の言葉を聞いてくれる者がいるように。ここに私の書き判がある。全能者が私に答えられるように。私と争う者が書いた訴状があれば、私はそれをしかと私の肩に担い、冠としてそれを私の身に結び、私の歩みの数を告げ、君主のように彼に近づこう」(三一35-37)と神に答えを迫るのである。ヨブの言葉は尽き(三一40)、ツォファルの三たびの語りはなく、エリファズとビルダデもはや言葉を発しない。

ここで、ヨブとヨブの三人の友人たちとの対話を傍で聞いていた年少のエリフが怒りに燃えて登場する。「ヨブに対して彼の怒りは燃えた。彼〔ヨブ〕が神より自分を正しいとしたからである」(三二2)。また「彼〔ヨブ〕の三人の友人たちに対しても彼の怒りは燃えた。それは彼らがヨブを有罪とする答えを見出せなかったからである」(三二3)。それでエリフは「ヨブよ、私の話を聞くのだ。私のすべての言葉に耳を傾けるのだ」(三三1)とヨブに傾聴を促し、説教を繰り広げる。エリフは厳格な神の応報を説く。「神が邪なことをされることも、全能者が不正を犯されることも断じてない。実に、彼は人の行いをその身に報い、人の道に応じて彼に遇される。神は邪なことを決してされない。全能者は公義を曲げられない」(三四10-12)。エリフもヨブの三人の友人たちと同じく、ヨブの苦難はヨブの罪に対する神の罰だと考えているのである。そしてヨブに神のさばきを待つよう勧める。「あなたは彼を見ることができないと言うが、さばきは彼の前にある。彼を待つがよい」(三五14)。エリフに対してヨブは一言も応答していない。

* * *

ヨブの三人の友人たち、エリファズ、ビルダデ、ツォファルはヨブと対話していく中で次第に感情的になり、時に激しくヨブを責めましたが、ヨブを訪ねたのは慰問のためだったのであり、ヨブのためを思って説諭したのであった。エリフも怒りに燃えて辛辣にはあるが、善意からヨブに説教をした。ところが、ヨブはエリファズ、ビルダデ、ツォファルについては「やぶ医者」あるいは「煩わしい慰め手」と言い、エリフには応答しなかった。友人たちは軒並み神の応報への堅い信仰に基づいて、ヨブが苦難に見舞われたという事実から遡ってヨブやヨブの息子たちの罪を想定している。しかし、ヨブは「若い時の咎」には思い当たる節もあるが、少なくとも一人前になってからは信仰上および道徳上の罪を犯した覚えはないし、実際犯してもいない(一1、22、二10)。またそれは神も認めるところであった(一8、二3)。ヨブの息子たちの罪についても、その可能性をヨブが案じていた(一5)というだけである。ヨブとしては身に覚えのない罪を認めるわけにはいかず、友人たちに反発するほかなかったのである。とはいえ、ヨブも神の応報を信じていた。信じていなければヨブが自らの正しさを神に訴えたり、神の不当を糾弾したりするはずもない。しかし、ヨブは友人たちとは異なり、神の応報への信仰によって現実を見る目が曇らされることはなかった。ヨブは義人でありながら苦難に遭った自らの現実と向き合い呻吟しつつ、悪人が榮えているという観察される事実も指摘しているが、これらは相まって神の応報の破れへのヨブの気づきを促したにちがいない。

ヨブはまた、自分を苦難に遭わせた神を「暴虐」と難じながら、その神に「証人」、「保証人」あるいは「贖う者」として現れることも望んでいた。ヨブは終始一貫義人であったのだから、神がヨブに二様に臨むとすれば、それはヨブの態度に応じてのことではなく、まったく神の側の事情によることであろう¹¹。となると、ヨブはどうかはわからないがヨブに二様に臨む神を認識していたということになる。この神はもはや応報の神を超えていると言わなければなるまい。

こうして、神の応報は十全に機能していないのではないかとの思いや、神は応報を超えているのではないかとの思いをヨブはいただくようになっていったと考えられるのである。

2.2 神とヨブとの対話

エリフの説教が終結したところで、突如神がつむじ風の中からヨブに答える。「知識を欠いた言葉で経綸を暗くするこの者は誰か。男らしく腰に帯を締めなさい。私はあなたに尋ねる。私に知らせなさい」(三八二-3)。神はヨブにそう命じ、「私が地の基を据えた時、あなたはどこにいたか。あなたが理解し知っているなら述べなさい」(三八四)という問いを皮切りに、次々にヨブに問うていく。地、海、朝、曙、深淵、死の門、暗黒の門、光、闇、雪の倉、雹の倉、東風、雨、稲妻、露の滴、氷、天の霜、星座、天の法則といった宇宙の万象について、それらを据えたのは誰か、それらの働きを定めたのは誰か、あなたか、あなたはそれらを知っているのか、あなたはそれらを統べられるのか、というように神はヨブにたたみかける(三八四-38)。次いで「あなたは獅子のために獲物を捕らえ、子獅子の食欲を満たせるか。彼らが巢穴で身をかがめ、隠れ家で待ち伏せしている時」(三八三九-40)という獅子についての問いに続けて、鳥、野やぎ、雌鹿、野ろば、野牛、駝鳥、馬、鷹、鷲について、それらの食と住みかを確保し、繁殖を司り、生態を保全しているのは誰か、あなたか、という具合に神はヨブに問うていく(三八三九-三九三〇)。もとよりヨブに答えられるはずもないのであるが、ヨブが答えられずにいると、神はヨブに追い討ちをかける。「全能者と争う者は彼を諫めようというのか。神を責める者はこれに答えるがよい」(四〇二)。ヨブは神に恭しく答える。「ご覧ください、私はつまらない者です。私はあなたに何と返答できましようか。私は私の手を私の口に置きます。私は一度語りましたが答えません。二度〔語りましたが〕これ以上は申しません」(四〇四-5)。

神はまたつむじ風の中からヨブに答えた。「男らしく腰に帯を締めなさい。私はあなたに尋ねる。私に知らせなさい。あなたは私の公義を破り、自分を正しいとするために私を有罪とするのか。あなたは神のような腕を持っているのか。あなたは彼のような声で雷鳴を轟かせられるのか」(四〇七-9)とヨブに厳しく問う。そして神はヨブに、自らの手になる怪獣ベヘモトとレビヤタンについて誇らしげに語る。ベヘモトについては「見るがよい、私があなたと共に造ったベヘモトを。彼は牛のように草を食べる」(四〇一五)、「彼こそ神の道のはじめであり、彼の造り主は彼の剣を彼に近づけた」(四〇一九)等々と語り(四〇一五-24)、レビヤタンについては「あなたはレビヤタンを鉤で引き上げ、綱で彼の舌を押さえられるか」(四〇二五)とそれが不可能なことを承知の上でヨブに問い、「地上に彼と並ぶ者はいない。彼は恐れを知らない者として造られた」(四一25)等々と語る(四〇二五-四一26)。そこでヨブは平身低頭して神に答える。「私は知りました。あなたはすべてができ、あなたには計画が妨げられることはないということ。知識を欠いているのに経綸を隠すこの者は誰か」。その通りです。私は私が理解していないことを述べました。私には不可思議で、知り得ないことを。「聞くのだ。私が話す。私はあなたに尋ねる。私に知らせなさい」。私は耳の聞くところであなたのことを聞いていましたが、今私の目はあなたを見ました。それで、私は退け、塵と灰の上で悔います」(四二二-6)。

* * *

つむじ風の中からヨブに答えた神は、しかし、ヨブの苦難にはいささかも触れなかった。神の答えはヨブの期待した答えではなかったと考えられるにもかかわらず、ヨブは神に降伏し、悔いた。これはどういうことであろうか。

ユングによれば、「ヤハウェは自分を説き伏せた我が子に責任を問うことを考えもしないし、自らのふるまいを説明することでヨブに少なくとも何らかの道徳的補償を与えることを思いつきもしない」¹²。そ

の代わりに「七十一節もにわたって彼は彼の惨めな犠牲者に世界創造者の力を告げ知らせる」¹³。しかも「ヤハウェは第一ラウンドの勝利では満足することができない」¹⁴で、「再度身構える」¹⁵。ユングはつむじ風の中から二度にわたって繰り返されたヨブへの神の答えについてそのようにコメントする。そしてヨブに関しては、神への第一の答えについて「哀れな小ささと弱さにもかかわらずこの人間は、自分が向き合っているのは人格的にきわめて感じやすい超人間的存在者であるということ¹⁶、それゆえとにかくすべての批判的な考えを控えて、神に対しても行ってよいと信じられているある道徳的要求について口にしないう方がよいということを知っている」¹⁷。神への第二の答えについては「賢くもヨブはここでヤハウェの攻撃的な言葉を採り入れ、自分が事実打ち負かされた相手でもあるかのように彼の足もとに伏す」¹⁸。このように、ユングの見るところ、ヤハウェの言葉は自らの力の誘示であり、ヨブの答えはそのような力の神に対する保身のための恭順と無抵抗にほかならない。

アーマンは神の答えについて次のように評する。「なぜ無実の人間である自分がこれほどひどく苦しんでいるのか。それを理解したいというヨブの熱烈で切実な嘆願に対してつむじ風の中から神が応答するのであるが、神の応答の中には何の答えも与えられていないということを見過してはならない。[…] 彼の答えは、自分は人間ごときに問われる筋合いはない全能者であり、答えを求めること自体、真実を探ること自体、理解したいという衝動自体が彼という強力な存在者への侮辱であるというに尽きる。神に問うてはならない。理由を尋ねてはならない。神にあえて挑戦する者は誰であれ彼の威容によってその場で顔れ、塵の中に押しつぶされる」¹⁹。アーマンはまた、ヨブの第二の答えで示された悔いについて次のように解する。「彼は「悔いた」が、それは自分の悪行を悔いたのではない（何ととっても彼は完全に無実なのである！）。彼は全能者の前で申し立てができると考えたことを悔いたのである」²⁰。

ヨブが神に降伏し、悔いたのは、ユングが言うように力の神に対する保身のための恭順と無抵抗なのか、アーマンが見るように威圧されて屈服したということなのか。テキストではヨブの心中に触れられていない以上、ユングの説は推測の域を出ないし、ヨブが神を前に自らを「つまらない者」と認識し、自らの無知を明確に認めた上で神に降伏し、悔いていることから、アーマンのようにヨブは単に威圧されて屈服したと見るのも無理がある。私はヨブが神にまみえるまでの経緯を踏まえ、ヨブは心から神に降伏し、悔いたと考える。つまり次のような次第であったと考えるのである。ヨブは、苦しみのさなか、神は応報を超えているのではないかとの思いをいだくようになった（2.1 参照）。そして、神がヨブに開示した内容——神は森羅万象を創造し維持しているということ、特に自ら造った怪獣ベヘモトとレビヤタンを誇り寵愛しているということ——およびヨブが正しいか否かということや応報について神がまったく触れないということからヨブは、神は応報とは関わりなく動いているということを確認するに至り、苦難はヨブの罪の有無とは無関係に、端的に罪なくして彼に降りかかったということを察知した。それでヨブは得心して神に降伏し、神慮をはかり得ない人間の分際で神に応報の神であることを期待したことを悔いたのであろう。八木氏が「神」の答えが示唆するのは、神の経緯は「義人には幸福を、不義なる者には災いをもたらすという条理」を超えている、善悪・義不義と幸・不幸は別問題だということだ²¹、あるいは「幸不幸は、当人が義人であるかどうかとは別問題だというのがヨブの見たとところと解される」²²としているのは当を得ている。

3 エピローグをたどる

神は今度はエリファズに向かって次のように言う。「私の怒りはあなたとあなたの二人の友人たちに対

して燃えた。あなたたちは私について私の僕ヨブのように正しいことを語らなかつたからである。しかし今、あなたたちのために七頭の雄牛と七頭の雄羊を取って、私の僕ヨブのところへ行き、全焼のいけにえをあなたたちのためにささげなさい。そうすれば私の僕ヨブはあなたたちのために祈るであろう。私は彼を顧み、あなたたちが私について私の僕ヨブのように正しいことを語らなかつたからといって、あなたたちに恥を負わせることはしない」（四二7-8）。エリファズとビルダデとツォファルが神の指示通りにすると、神はヨブを顧みて（四二9）、三人は神の懲らしめを免れた。そして、「ヤハウェはヨブが彼の友人たちのために祈った時、彼の境遇を元通りにした。またヤハウェはヨブのすべての持ち物を二倍に増やした」（四二10）。「ヤハウェはヨブの終わりをはじめより祝福した」（四二12）。ヨブは羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛千くびき、雌ろば千頭を保有することになり、七人の息子と全地で最も美しい三人の娘を授かり、天寿を全うした（四二12-17）。

* * *

神はヨブの境遇を元通りにし、ヨブをさらに祝福して、ヨブに失ったものの二倍の数の家畜を与えた。また、亡くしたのと同数の七人の息子と三人の娘を授け、しかも三人の娘は絶世の美女であった。そしてヨブ自身、天寿を全うした。これらはヨブが主張してやまなかつた彼の正しさを認めた神の応報なのであろうか。そうではないと考えられる。

神はヨブの三人の友人たちに対しては神について正しいことを語らなかつたといって怒ったが、ヨブに関しては神について正しいことを語ったと認めた。このことをもって神がヨブの正しさを認めたと解する向きもある²³が、神が認めたのは、ヨブが主張した彼の正しさではなく、ヨブが神について語った内容の正しさであろう。ヨブの三人の友人たちは皆応報の神について説いた（2.1参照）が、ヨブは応報を超えた神を洞察した（2.1、2.2参照）。したがって、神がヨブに関して神について正しいことを語ったと認めたということは、神が自らを応報を超えた神であると認めたということでもある。

また、神がヨブの境遇を元通りにしたのが、ヨブが彼の三人の友人たちのために祈った時であったということも、神がヨブが固執した彼の正しさとは無関係に²⁴ヨブの苦難を補償したということを示唆する。

並木氏は「苦難は理由なしに下され、その解消も理由なしに行なわれた」²⁵と見るが、これをヨブの側から表現すれば、八木氏の言うように「ヨブには彼がなぜ災難にあったか最後までわからないのだが、同様になぜ再び幸福が訪れたのかもわからない」²⁶ということになる。

神は応報とは別の理由で、あるいは理由なく、かつてヨブに下した苦難を補償したということになるう。

4 ヨブの苦難をどう考えるか

以上、ヨブの苦難に焦点を合わせて『ヨブ記』をたどった。本稿では、ヨブにありもしない罪を着せて²⁷ヨブの苦難の不条理を覆うようなことはせず、義人ヨブの苦難の不条理を真正面から見つめてきたが、そこから何が見えてくるであろうか。改めてヨブの苦難について考えてみよう。

ヨブの苦難の内容は、幸福な生活の突然の破綻である。具体的には、突如、家畜と牧童たちをことごとく失い、七人の息子と三人の娘を全員亡くし、自らも全身を悪性の腫れ物に侵されたことである²⁸。

ヨブの苦難の理由は、神へのヨブの信仰はヨブが義人であるとはいっても所詮ご利益信仰であろうと勘ぐるサタンに対して、神へのヨブの信仰はご利益とは関わりのない神のための信仰であることを神が確認するためであった。そしてそれはヨブの知る由もないことであった。しかも苦難に遭っても神へのヨブの忠誠は微動だにせず、神へのヨブの信仰が真正なものであることが実証されたのであった。

ところが、ヨブのもとを訪れた友人たちは一様に神の応報を堅く信じて、ヨブの苦難の現実から遡ってヨブやヨブの息子たちはそれに相応する罪を犯したにちがいないと憶測し、ヨブに悔い改めを勧める。しかしヨブには心当たりがないため、友人たちの忠告をしりぞけるほかない。さらにヨブは、義人の苦難という自らの身に降りかかった現実と悪人の栄えという観察される事実を踏まえて、神の応報が十全に機能していないのではないかの思いをいただくようになっていく。しかしそれでもヨブは神の応報を信じていたので、神に向かって、義人である自分を苦難に遭わせた神は不当であると抗議し、苦難の理由の開示を求める。ヨブはまた、苦しみのさなか、終始一貫義人として生きてきたヨブに対してどうしてかはわからないが暴虐と恵みの二様で臨む神を認識する。遂に神がつむじ風の中からヨブに答えるが、神はヨブの苦難には一切触れず、神が創造したものとその働きの実例をヨブに示して、神の創造や創造したものへのからはヨブのあずかり知るところではないということをヨブに知らしめる。ここに至って、神は応報を超えているというヨブの思いは確信となり、ヨブは、苦難はヨブの罪の有無とは無関係に、端的に罪なくして彼に降りかかったということを察知し、得心して神に降伏し、神慮をはかり得ない人間の分際で神に応報の神であることを期待したことを悔いる。

神は、応報の神について説いたヨブの三人の友人たちに対しては神について正しいことを語らなかつたといって怒り、応報を超えた神を洞察したヨブに関しては神について正しいことを語ったと認めた。このことによって神は自らを応報を超えた神であると認めたことになる。神はヨブが彼の三人の友人たちのために祈った時、ヨブをかつての境遇に戻し、ヨブをさらに祝福した。ヨブは失ったのの二倍の家畜を保有することになり、亡くしたのと同数の七人の息子と三人の、それもこの上なく美しい娘を授かった。そしてヨブ自身、天寿を全うした。神はこれでヨブの苦難を補償したということのようであるが、その時期はヨブが彼の三人の友人たちのために祈った時であり、ヨブが主張してやまなかつた彼の正しさを神が認めたからというわけでも、ヨブが神に降伏し、悔いたことや、神について正しいことを語ったということを神が評価したからというわけでもなさそうである。

ヨブの苦難は、まず、人間の禍福は当人の行いの正不正や人となりの善し悪しとは無関係であるということを示しているであろう。そして、人間の禍福への神の関与を前提とするなら、神は当人の行いの正不正や人となりの善し悪しに応じて禍福を与えるわけではないということを示唆しているであろう。そのような神を、小坂国継氏は「倫理的尺度を超越した神」²⁹と言い、関根清三氏は「応報倫理を超えた存在の根拠であり、善悪の彼岸において辛うじて人と出会う、謎のような創造者」³⁰と表現する。この神は、並木氏の言うように「自由な方」³¹なのか、ユングの見るように「無道德」³²なのか。この神は、応報を超えた何らかの原理に立っているのか、あるいは何の原理にも立っていないのか。テキストからは確定できない。言えるのは、ヨブの苦難から浮かび上がってくる神は応報を超えた神であるということまでであろう。そのような神を人は信仰し得るのかという疑問が湧いてくるが、十津守宏氏の次の見解がこの問題について有益な示唆を与えてくれる。「逆説的ではあるがヨブ自身が神の「見神」を通して悔い改めに至らしめられたように、神の超越性を超越性としてありのままに受け入れることは、我々が経験する理解不能かつ不条理な歴史的現実には深い宗教的な慰めをもたらすものなのである」³³。十津氏の言うように、神の超越性を受け入れれば、人間の理解を絶する応報を超えた神への信仰も保てるのかもしれない。ヨブが神に降伏し、悔いた時、彼もそのような信仰に到達していたにちがいない。そしてその信仰によって自らの苦難の意味——苦難が降りかかったのは自らの罪のせいではなく、人間の理解の及ばない神慮によるものであるということ——も洞察し得たのであろう。

人間の禍福は当人の行いの正不正や人となりの善し悪しとは関わりがないということ、したがって義人

や善人でも苦難に見舞われることがあるということ、神は応報を超えているということ、神の超越性を認めることで人間の理解の及ばない応報を超えた神への信仰も保つことができるということ、その信仰によって苦難の意味が洞察されるということ、はからずも苦難が補償されることもあり得るということ、これらのことをヨブの苦難から教訓として汲みとり得るのであり、その限りヨブの苦難はいわれのない苦しみにあえぐ人たちにとって慰めとなるにちがいない。

註

引用文中の〔 〕は引用者による補足ないし説明、〔…〕は引用者による省略を表す。
洋文献からの引用文はすべて私訳であるが、既訳も参考にさせていただいた。

1 『ヨブ記』からの引用は下記に所収のものを底本とした私訳である。

K. Elliger & W. Rudolph (Hrsg.), *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Deutsche Bibelgesellschaft, 5. verb. Aufl. 1997.

私訳に際し、訳語の選定や語句、章句の解釈に関して、以下を参考にさせていただいた。

日本聖書協会訳「ヨブ記」『口語訳聖書』日本聖書協会、新約：1954年、旧約：1955年。

新改訳聖書刊行会訳「ヨブ記」『聖書 新改訳』日本聖書刊行会、1973年。

共同訳聖書実行委員会訳「ヨブ記」『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会、1987年。

並木浩一訳「ヨブ記」並木浩一・勝村弘也訳『ヨブ記 箴言』〈旧約聖書XII〉岩波書店、2004年。

日本コンピュータ聖書研究会『J-ばいぶるHEBREWデータCD-ROM』ライフ・クリエイション（いのちのことば社）。

Artur Weiser, *Das Buch Hiob* (Das Alte Testament Deutsch Teilbd. 13), Vandenhoeck & Ruprecht, 7. Aufl. 1980.

浅野順一『ヨブ記註解』I・II・III・IV、創文社、1965・1968・1971・1974年。

関根正雄『ヨブ記註解』〈関根正雄著作集第9巻〉新地書房、1982年。

並木浩一「ヨブ記 解説」並木浩一・勝村弘也訳『ヨブ記 箴言』〈旧約聖書XII〉岩波書店、2004年。

引用に際しては、章を漢数字（一方式）で、節を算用数字で示す。

『ヨブ記』は散文のプロローグ（一―二章）とエピソード（四二章7―17節）が枠をなし、韻文の本編（三章―四二章6節）を挟み込む構成になっている。枠と本編で文体が異なり、内容も必ずしも符合しないことから、両者は異なる資料に基づいており、それらが恐らく本編の作者によって合本され編集されて『ヨブ記』が成立したと考えられている。また、その後手を加えられた部分や欠損した部分もあると見られている（cf. Weiser, op. cit., S. 7-9. 関根正雄、前掲書、1―5頁、並木「ヨブ記 解説」317―334頁参照）。本稿ではそういった『ヨブ記』の成立や編集過程の問題には立ち入らず、現形の『ヨブ記』を所与のテキストとして解釈していく。

2 浅野順一『ヨブ記の研究』創文社、1962年、11頁参照。

3 原典を子細にたどるので、本稿はヨブの苦難という観点からの『ヨブ記』の一つの読みを提示する試みともなるであろう。

4 考察するに当たり先行研究を参照するが、この問題に関する先行研究は膨大にある。本稿では、先行研究の中でもとりわけ義人の苦難の不条理を鋭く意識し、そこにこだわったものを取り上げることにする。

5 八木氏は、『ヨブ記』の本体部分（本編）は「真正な宗教文書」なのに序章（プロローグ）と結び（エピソード）が付くと「全体がおかしくなる。「神」までおかしくなる」と見て、現形の『ヨブ記』に描かれる「おかしげ」な神を「カミサマ」と呼んで「神ご自身」と区別する（八木誠一「宇宙の神と人間の道」『福音と世界』第66巻8号、2011年8月、新教出版社、40頁）。

6 同論文、41頁。

- 7 C. G. Jung, *Antwort auf Hiob* (C. G. Jung Gesammelte Werke Bd. 11), Walter-Verlag, 6. Aufl. 1992, § 579.
- 8 *ibid.*
- 9 Bart D. Ehrman, *God's Problem: How the Bible Fails to Answer Our Most Important Question—Why We Suffer*, HarperOne, 2008, p. 168.
- 10 並木「ヨブ記 解説」347–348頁。
- 11 研究者はヨブに臨む神について二面性を指摘し、それを様々に表現している。アルトゥール・ヴァイザーは「彼と闘い彼を打ち砕く絶対的な力の神」と「彼が信じ訴える愛と真実とまことを持つ神」、「怒りの神」と「愛の神」(Weiser, *op. cit.*, S.128-129)、浅野順一氏は「彼を傷ける第一の神」と「包む第二の神」、「打つ神」と「癒す神」(浅野『ヨブ記註解』Ⅱ、70、157頁)、関根正雄氏は「敵なる神」と「友なる神」、「怒りの神」と「恵みの神」、「敵なる神」と「味方なる神」(関根正雄、前掲書、148、169–171頁)、ユングは大胆にも「ヤハウェの中の悪」と「ヤハウェの中の善」、「迫害者」と「助け手」(Jung, *op. cit.*, § 567)と表現する。
- 12 Jung, *op. cit.*, § 584.
- 13 *ibid.*, § 587.
- 14 *ibid.*, § 592.
- 15 *ibid.*
- 16 本稿の19頁で引用したが、ユングはヤハウェに「感じやすさと猜疑心」(*ibid.*, § 579)を見てとっていた。ユングは感じやすいことを神の人格の主要な特性の一つと理解しているようである。
- 17 *ibid.*, § 565.
- 18 *ibid.*, § 599.
- 19 Ehrman, *op. cit.*, p. 188.
- 20 *ibid.*, p. 187.
- 21 八木、前掲論文、39頁。
- 22 同論文、40頁。
- 23 小坂国継『倫理と宗教の相剋——善人がなぜ苦しむのか——』ミネルヴァ書房、2009年、46頁註10参照。
- 24 さらに、ヨブが神に降伏し、悔いたこととも、神について正しいことを語ったこととも無関係であろう。
- 25 並木「ヨブ記 解説」350頁。
- 26 八木、前掲論文、41頁。
- 27 ヨブに何らかの罪を見る先行研究は甚だ多い。中にはヨブに罪がないことがむしろ罪であるという説さえある。たとえば廣瀬久允氏は次のように述べる。「罪を犯さず、また自らの無実を主張してやまない義人ヨブというのは、人間でありながら神の完全性を篡奪しようとの意図を示していないだろうか。つまり、ヨブは罪を犯さなかったこと、および自らの無実を主張することによって、かえって罪を犯していたことになる」(廣瀬久允「苦難の意義——ヨブ記——」真山光彌・廣瀬久允・笠井健一『旧約聖書の思想』学術図書出版社、1986年(第2版)、106頁)。
- 28 友人たちに責められたことや、友人たちとの対話のさなかしばしば神に問いかけ訴えるも一向に神から答えてもらえないこともヨブを苦しめたであろうが、ここでは神に与えられた苦難そのものを問題にする。
- 29 小坂、前掲書、22頁。
- 30 関根清三『〔改訂版〕倫理思想の源流——ギリシアとヘブライの場合——』放送大学教育振興会、2005年、261頁。
- 31 並木浩一『〔ヨブ記〕論集成』教文館、2007年(再版)、156頁。
- 32 Jung, *op. cit.*, § 560; cf. § 568, 605.
- 33 十津守宏「ユダヤ教における災因論」『鈴鹿短期大学紀要』第32巻、2012年、144頁。